

第157号

平成14年10月

E-mail : © 2002  
shimz@mb.infoweb.ne.jp  
LDG04167@nifty.ne.jp

# SCだより

編集 発行 人  
清水 吉男  
(株)システムクリエイツ  
横浜市緑区中山町 869-9  
電話 045-933-0379  
FAX 045-931-9202



22回め



### MENU

特製ブレンド 380  
レモンティー 350  
日替りケーキ 300  
ぷるせす 無料

アルコールは置いていません

1年という時間は、あっという間に過ぎてしまう。ここに来るソフトウェア・エンジニアたちも、目の前の納期や「できない理由」を盾にして、プロセスの改善を後回しにしていると、簡単に1年という時間が過ぎてしまう。この「1年」という時間をやり過ごしたことで、状況は1年前と同じではなくなっていることに、多くのエンジニアは気がついていないように思われる。

今も、カウンターの向こうで2人のエンジニアが、チームの取り組みの状況について話しをしている。どうやら、プロセスの改善という取り組みが捗っていないようだ。奥のテーブルの3人連れの客にコーヒーを運んでカウンターの中に戻ったところで、ボールが飛んできた。

「マスター、プロセスの改善って良く分からなくなってくるんです。自分では分かったつもりだったのですが、チームのメンバーに話しをするうちに、分からなくなってしまうんです」「つまり、分かっているけどどうとだね」「そういうことなんですよ」「ところで、プロセスって何？と聞かれたら、どう答えるかな？」「プロセスって、工程とかステップといった作業の単位ですよ」

「教科書の答えそのままだね。まっ、良いでしょう。で、その作業は誰がやるの？」「それぞれの担当者です。私も含めてですが」「そう、ここで問題になっているプロセスと言うのは、それぞれの担当者の作業のことだね。つまり、プロセスの改善というのは、それぞれの人の作業の改善ということになるが、なぜ、その作業を改善しなければならぬの？」「要求に合わないからです」

「具体的には？」「たとえば、顧客の求める期日にあるような作業になっていないからです」

「他には？」「バグデータを分析してみると、仕様の曖昧な状態がテストの段階まで発見されないケースが5割程あります」

「ということは、どのプロセスを変えようというのかな」「今の例だと、仕様の抽出に関するプロセスと、それと関連するのですが、見積りに関するプロセスが対象です」

「どうやら、頭の中では分かっているようだ。」「そこまで分かっている、どうして作業の仕方を変えるのが難しいのかな？」「という質問をすると、うまく答えられずに黙ってコーヒーを啜っている。

「プロセスを変えると言うことは、習慣を変える事だということには気がついてますか？」「習慣、ですか？」「そう、何ヶ月もかけて先輩のやり方を見て覚

えたものもあるだろうし、間に合わせ的に対応したものもあるだろうが、それらはみな、習慣として身に付いてしまっている。その証拠に、同じような場面に遭遇すると同じことをやってしまう」

「習慣として身に付いているからですか？」「あなた自身、新人の時は、作業の仕方や組織の約束事などをどうやって覚えた？」

「説明の場での話しや、実際の作業の中で先輩の話しや注意などをノートに記録して、その晩に家に帰っては読み直していましたね」と言って、彼の表情が変わった。気がついたようだ。

「そこまでやった人は少ないだろうが、似たようなことは誰でもやって来たと思うよ」

「あの時は、先輩たちと早く一緒に仕事をするために、仕事の仕方を早く覚えなくちゃという気持ちで、毎日、メモを追いかけた記憶があります」

「早く覚えないと一緒に仕事ができないからね。」「一人前」にあこがれたかも知れないね」「でも、そこまでやっていたのは半年から1年ぐらいかな。ある程度、やり方が分かってくると、止めていましたね。今、もう一度、それが求められているのです。しかも、「先輩」という適当な先例がない状態で、プロセスを変化させることが求められているわけですね」

「そういうことだね」

「習慣とは、『ROM』と同じで、いちいちロードしなくても電源が入れば動き出すプログラムみたいなものでね」と話したところで、彼が遮った。

「習慣を変えるということは、その『ROM』のコード(オブジェクト・コード)を書き換えることを意味するわけですね。幸いにも、その『ROM』は、『E』PROMみたいなもので、書き換えはできるのですが、簡単には書き換わらないという感じですか」

「なかなかうまく表現できたね」「入社したときは、この『E』PROMは、仕事の仕方については「空」の状態、それでは仕事にならないので、毎晩、必死にノートを読んで、その日の作業を思い出してイメージを繰返すことによって『E』PROMに作業のコードを書き込んだわけですね」

「その通り」

「プロセスの改善、というのは、新しい要求に合わせて、この『E』PROMのコードを書き換えることを意味するのですか？」「そう。では『E』PROMが「空」の時は、半年ほどで覚えたのに、今はどうして難しいか分かるかな」

「はい、既に『E』PROMに作業をするための何らかのコードが入っていて、電源が投入されるとそれが動き出すからです。しかも、ずっとそれでやって来たプロ

グラム・コードですからね」「ところで、あなたには、「PFD」の話はしたのかな？」

「はい、教えてもらっています。今、「PFD」の使い方も分かりました」といって、鞆からノートを取りだして、メモを取りながら説明し始めた。

「PFDは作業、すなわちプロセスを設計するためのツールですね」

「その通り」

「PFDを使って、要求を満たすため有効な作業の関数(プロセス)を設計するわけですが、その際に、データ、すなわち中間成果物を効果的に受け渡ししながら、最終成果物に繋いでいきます。ここを上手にすると、パフォーマンスが2~3倍も違ってくるわけですね」

「OK、でも、そうやって今回の要求を満たすための作業の設計はできても、『E』PROMの内容は以前のままでよ」

「はいそうです。マスターはよく「シミュレーション」という言葉を使われていましたが、それは『E』PROMの中身を書き換えるための行為ですね。シミュレーションは、作業の疑似体験ですから、ちょうど「コンパイル」するのと同じで、新しく考えたプロセス(関数)のオブジェクト・コードが、自分の中の『E』PROMの上に書き込まれるような感じになると考えています」

「それでいい。ただ「上書き」だから1回コンパイルしたぐらいでは書き変わらないね」

「はい、逆に、昔のコードが残っている分だけ、中途半端だと混乱するかも知れません」

「その時に、直ぐに元通りの方法に戻す理由が手に入っているわけだね」

「ここで必要なのは、私自身が新入社員のときにやった行為ですね」

「そう、あのとき、作業を覚える行為を「業務」の中でやるうとは思わなかっただろう」

「はい、純真だったのですかね。なんとかが早く先輩の人たちと一緒に仕事ができるようになるうという気持ちの方が強かったですね」

「どうやら、プロセスを変えることの意味と、それが難しい理由は分かったようだ。」

「大事なことは、要求に合ったプロセスを自由に設計でき、それを自在に自分の『E』PROMに書き込む方法を確保することで、これが手に入れば、顧客の要求を満たせるし、プロセスの改善は連続的なものになる」

「当然、CMMのアセスメントも慌てなくても良いわけですね」

「このあと、CMMのアセスメントが盛んに行われるようになるだろうが、プロセスを自在に設計し、自分の『E』PROMを自由に書き換える能力が手に入っていないければ意味がないんだよ。プロセスの改善というのは、そういう個人の能力の開拓でもあるんだね」

「マスターの言う、「仕事の楽しさ」というのは、その向こうにあるような気がします」

プロセスの改善は、経験の中で得た自分の中のROMコードを書き換えることである。だから難しいし、シミュレーションによって何度もコンパイルしないと書き変わらない。

# 暁鐘の音

140

## 自殺が問題にならない国

先日、さわやかな秋空の下、妻に誘われるまま三時間ほど家の周辺を散歩してみた。半年程前から取りかかっていた原稿も書き上げたところだったので、普段なら車でしか行かないところまで歩いてみた。家々の庭の様子を見ながら歩くのもなかなか楽しいものである。

家の近くまで帰ってきたところで踏み切りを電車が塞いでいた。保線の人が走りまわり、救急車もサイレンを鳴らして到着したところだった。この踏み切りはときどき遮断機を突き破られるので、ついにやめたかと思つて近づいてみても、ぶつけられた自動車がな。その踏み切りが通れないので、一つ後ろの踏み切りから渡ろうと思つて、そつちに回つてみた。事故は、こつちの踏み切りで起きていた。それも遮断機をくぐつての飛び込みである。車両の下から膝から下の足の一部が見えている。レールにそつて転々とする赤い塊が肉切れたと分かつたとき、妻は顔色を失つた。

最近の自殺者は年間約三万人いる。このうち、事業の失敗や失業な

どの経済的理由での自殺者が約一万人いると見られている。交通事故死よりも多いかも知れないのである。毎日三〇人も人が、経済的理由で自殺している計算になる。バブルがはじけてからこの一〇年間で五万人を超えて、かつてのベトナム戦争での米兵の戦死者の数を超えたのではないかと推計する人もいる。

ベトナム戦争の場合、増え続ける戦死者の数にアメリカの国民が政府に対して「NO」を突きつけたことで政権が交代した。かろつて命を繋いだ兵士も、その後の精神的後遺症に悩まされているし、家族も国もベトナム戦争の後遺症を長く引きつづつた。

先のアフガニスタンでの戦争では、米兵が一人犠牲になつただけで国中が騒ぎだした。もし、作戦の失敗で、米兵に一〇〇〇人も戦死者が出ようものなら、立ち所に政権は覆るだろつ。いや、今日ではそれだけでは済まないかもしれない。

日本では、毎日三〇人もの人が経済的理由で自ら命を絶つていく。これが、国政の中で全く問題にならない。まるで、自殺する者が悪いとでも言つたかのように扱われている。「経済戦争」で弾に当たつたのだから仕方ないとも言うのだからか、事業に失敗した代償が「命」だとすれば、この国では誰も事業なんか興せない。

日本という国に生まれ、国が契めるままに学校に行き、会社に就職(就社)し、家庭を犠牲にしてまで、会社のために働いてきた。そうして二五年経つたとき、国の政策の失敗から、土地バブル、株バブルを招き、その後の政策の失敗も重なつて、不況とデフレと産業の空洞化という大波の中で仕事を失つてしまつた。再就職を試みたが、縮み上がった日本の中には仕事を見つけることができない。

仕事を失つたとき、自分の手元には「技術」と言えるものは何も残つていないことに気付かされる。それが、「サラリーマン」を安易に受け入れたことの代償と気付いたときには遅い。

バブルのピーク時にマイホームを手に入れ、長期のローンを組んで日本経済の拡大に協力してきた。それが、突然の地価の下落で巨大な債務を背負う形になった。その後、銀行のために生活費を切り詰めて必死になつてローンを返済してきた。だがそれもリストラに遭うまでの話である。一年経つても仕事が見つからない。解雇法が未整備なことが、逆に再雇用の障害となつていり、その中では、政府の「再雇用プログラム」も欺瞞でしかない。

今の日本の住宅ローンの制度では、マイホームを手放しても債務だけが残つてしまふ。それを解消するには、「破産」するか「命」で払うしかないのである。そう書いてある。つまり、「GDP」という見せ

かけの豊かさ拡大するためにマイホームを奨励しておいて、いざとなつたら「命」で払え、といつのである。これでは経済的に行き詰まれば自殺者が増えるのは当たり前である。

資本を調達するための市場が整備されていらないため、日本では、事業を興す資金を「融資」に依存することになる。「融資」には返済の「保証」が必要になる。つまり、資本を持つているか保証するものがなければ、日本では事業を興せないことになるし、事業の

### 今月の一言

「徳川時代における女子教育というものを通じて、如何に立派な人間教育と文化ができたかということは、実に驚嘆すべきものがある」 安岡正篤著「易とはなにか」より

日本の戦後の復活と明治維新は、世界史の中で際立つたトピックだといふ。その何れも、背後に「女性」があると考えている。江戸時代に、分けてなく女子に対する教育が行われてきたことが、明治維新を支えた。その後の日本の興隆を支えた。戦後の混乱期でも、男どもはおろおろする中で、踏ん張つたのは女性であった。それは私自身の家を見てもわかる。職業軍人だった父は、価値観が一八〇度変わってしまった中で活躍の場を失つた。その父に代わつて、母は必死に家族を支えた。母にあつたのは人としての教養と生きるための術や気転だけだつた。それはまさに徳川時代から受け継がれてきた教養だつた。

失敗を命で払つことになるのである。こついつ仕組みを変えないかぎり、経済的理由による自殺者は減らない。これが減るときは、右肩上がりのときか、縮小均衡でバランスがとれた状態になつたときである。

人は、誰でも人として生きる権利をもつている。それは憲法でも保証されていることである。だが、今の日本では経済的に失敗したときや、老後の蓄えに失敗したとき、この憲法の保証が機能しない。

戦後の「新しい教育」の中で、徳川時代から受け継がれてきた人としての教養が、忌まわしいものとして教育の場から駆逐されてしまつた。その上、女子の教育は男子のそれと比べて軽く扱われてきた。といふより「平等」は教えるも、「教養」を教えてこなかつた。その結果、最近では、家庭の中にあつても、家を支える存在としての「男子」に託す意識が強く、「女子」の存在は軽い。悪く言えば放置されている状態だ。それは街の中を歩いてみれば分かる。今、明治維新や戦後につく第三の変革期だといふ人がいるが、あの時とは状況が大きく違つている。家庭に「教養」が無くなつた中で、同じように乗り切る力があるかどうか。